

白門経友会

多摩キャンパスは、桜が満開で
新年度を迎えております

長い冬が終わり暖かい日が続いて
おります。

三月七日には経済学部教員の懇親
会(経和会)が多摩センターの京王
プラザホテルで開催されました。

篠原正博学部長に続き白門経友会
の齋藤巖氏から挨拶がありました。

引き続き中條誠一、鷺谷轍、長谷
川聡哲教授、中尾将人助教の退職の
挨拶、送別が行われました。

また、国際経営学部への移籍の深
町英夫教授、鳥居昭夫教授および



ドウマヤス、アリヤン助教からも
挨拶がありました。なお、三月
二十五日には卒業式が挙行され、経
済学部では約一千名を送り出しまし
た。四月二日には桜の花の下で入学
式が挙行される予定です。



新入生向けのイベントの開催

今年度も白門経友会の後援により
新しい仲間作りの取り組みとして、
新入生向けのイベントを以下の通り
開催いたしました。なお、具体的
な活動は学生組織の Tamariva が
行いました。

今までの新歓パーティとは違う、
一度で終わらず継続的に開催し、交
流を深めていく場です。新一年生の
やりたいことも応援していきます。

【日時】

① 三月二十三日(土)

十四時～十六時 七二〇五教室

② 三月二十五日(月)

十二時～十四時 七二〇五教室

【内容】

・緊張感ほぐします! アイスプレイ
クゲーム

・実際、大学どうなのよ? 在校生の
実体験、新入生同士で仲良くなりた
い! グループワーク(趣味・特技
別で分かれます)

・次はどんな集まりにしよう会議

【参加対象】

二〇一九年度新入生(全学部対象)



※今回のイベントでは、新一年生が
四十三名参加しました。



経済学部のゼミの活動について

本学部では各ゼミにおいて学内を
超えた活動も積極的に行われており
ます。以下、最近の活動事例を紹介
いたします。なお、詳細は本学部の
ホームページを参照してください。



◎二〇一九年度入学予定者向け経
済学部入学前特別教育プログラム
(研究発表会)の実施

高大接続教育の一環として開始し
た経済学部入学前特別教育プログラ
ム(研究発表会)を二〇一九年三月
十三日(水)に実施いたしました。

本プログラムは、経済学部へ進学
予定の附属四校(中央大学附属高等
学校、中央大学杉並高等学校、中央
大学高等学校、中央大学附属横浜高
等学校)の生徒を対象にした新しい
プログラムで、二〇一八年度入学者
からスタートし、二〇一九年度入学者
は第二回目の開催となりました。

経済学部で学ぶにあたり必要な力
をつけていただくために、入学前に
本学部教育の特徴の一つであるゼミ
活動の一端を経験していただき、自
信と誇りをもって経済学部に入學し
てきていただくことを目的としてい
ます。



プレゼンの様子



約 200 名の附属生が参加



懇親会の様子



審査員の中学教員と職員

これまで、高校生は本学経済学部
の若手教員が執筆した『高校生から
の経済入門』（中央大学経済学部編、
中央大学出版部）から出題された課
題について、五名程度のグループで
課題に関するデータや資料を集めた
り、それらに基づいて議論したり、
プレゼンテーションのコンテンツを
作成するなどアクティブ・ラーニン
グに取り組んできました。

三月十三日は、十一時～十五時ま
で一時間の昼食休憩を挟んで一チー
ム四～五人が、パワーポイントを用
いながら、持ち時間約十分で発表を
行いました。その後、経済学部教員
より総括講義、優秀賞（二位、二位）

の発表があり、参加生徒と引率教員
との振り返り後、生協食堂にて懇親
会が行われました。

◎谷口ゼミ・丸山ゼミが「第九回環
境シンポジウム」立川発！みんな
でつくる環境ビジネス」で提言
を発表

二〇一九年二月二十七日（水）に
立川商工会議所において立川商工
議所 ECO イノベーション推進協
議会の十年間の活動をまとめたビデ
オ「Re・eco 立川商工会議所
eco プロジェクトの軌跡と未来」
が上映されました。

このビデオには二〇一六年八月よ
り開始した経済学部との連携活動が
収められるとともに、昨年の環境シ
ンポジウムで谷口ゼミの学生が提言
した「Re・eco」という言葉
が同協議会の活動の象徴としてタイ
トルに盛り込まれました。

ビデオ上映に引き続き行われた第
一部の協議会と学生の連携事業・研
究発表において、経済学部・谷口ゼ
ミ・立川班の学生が「立川市の地域環
境」との演題により、食品ロスと規
格外野菜に焦点を当て、廃棄野菜を
減らすハブによる流通システムを構
築することによって、住みやすい環

境づくりを行うことについての提言
を行いました。

続いて、経済学部・丸山ゼミ・紫波
チームの学生が「紫波町の地域活性
化」との演題により、岩手県紫波町
との連携により、主要作物であるり
んごを活用した新たな商品「りんご
琥珀糖」の試作品を実際に開発し、
その販売の実現と連携活動による地
域の活性化を志向する提言を行いま
した。



谷口ゼミ立川班の発表



丸山ゼミ紫波チームの発表

今回提言を行った谷口ゼミ・立川
班、丸山ゼミ・紫波チームは、同協議
会委員の方々が昨年十月二十七日
（土）に開催された経済学部プレゼ
ンテーション大会を見学され、連携
活動を行う対象ゼミとして選ばれた
もので、研究発表の後、同協議会の
省エネ体験プロジェクト事業として
位置づけられている連携活動への積
極的な取り組みに対して、立川商工
会議所会頭・ECO イノベーション
推進協議会座長名による感謝状

が、藤本淳座長よりそれぞれの代表
学生に授与されました。

◎経済学部・FLP 国際協力プログ
ラム林光洋ゼミが高校、中学校、小
学校で訪問授業を実施

経済学部および FLP 国際協
力プログラムの林光洋ゼミは、
二〇一八年度に学生が自主的に始め
た訪問授業を二〇一八年度も実施し
ました。今回は、高校だけでなく中
学校向け、さらに初小学校向けの
訪問授業も行ないました。

【高校向け訪問授業】

高校を担当するグループは、「世
界の問題に興味をもってもらおう」お
よび「大学生生活のイメージを具体化
するきっかけをつくってもらおう」こ
とを目的に、神奈川県立相模原高校、
中央大学高校、中央大学附属高校、
中央大学杉並高校の四校で訪問授業
を実施しました。

高校向けの授業では、二〇一七年
に林ゼミが現地調査で訪ねたフィリ
ピンの「環境問題」や「教育問題」
を題材にしたクイズを出したり、写
真や映像を用いて説明したりした
後、生徒と一緒にグループワークを
しました。

教育へのアクセスの悪さに関するグループワークでは、『学校に通えない』が引き起こす負の連鎖』をテーマに教育を受けられないことがどのような問題につながってしまうのか、について考えました。グループワークでは、生徒が積極的に参加し、話し合っている様子が目立ちました。生徒からは、「グループワーク形式の授業を普段やらないので新鮮で楽しかった」や「他の人の意見を聞き、さまざまな考え方があることを知ることができてよかった」といった感想が出ました。

授業の最後には、高校生に対して「世界の問題に興味をもち、実際に行動してみよう！」というメッセージを送り、締めくくっていました。



神奈川県立相模原高校での授業風景

【中学校向け訪問授業】

中学校を担当するグループは、中央大学附属中学校、中央大学附属横浜中学校、品川女子学院、東京都稲城市立稲城第一中学校の四校で訪問

授業を実施しました。

「フィリピンがもし〇〇人の村だったら」という切り口から、生徒にフィリピンの教育、インフラ設備、ゴミ処理等の問題について体感してもらおうとできる授業を設計し、提供しました。前年のフィリピン現地調査で撮影した実際の写真や動画を多く用いることで生徒の視覚に訴えかけるように工夫していました。

グループワークでは、四～六人の生徒で構成されるグループに一人のゼミ生をファシリテーターとしてはり付け、積極的に話し合いをしてもらいました。ゴミ山がある街で暮らす人々や代替教育制度を利用して学習する人々に関する資料を配布し、そこから見えるフィリピンの問題点やその問題の解決策をグループの中で話し合ってもらい、最後に、日本人としてできることについて考えてもらいました。

授業後のアンケートには、「フィリピンの現状を知り、自分はいかに幸せな生活をしているのかということに気づいた」、「自分の当たり前が世界の当たり前ではないことがわかった」、「国際協力をやりたい」、「日本が開発途上国に頼って生活しているとは知らなかった」、「自分の好き

なことや得意なことで人を助けることができる」と知り、自分の将来の可能性、選択肢が広がった」といった感想が生徒たちから寄せられました。



200人近くの生徒を対象とした品川女子学院での授業風景

【小学校向け訪問授業】

小学校を担当するグループは、「世界のことにについて知るきっかけをつくる」ことを目的に、東京都あきる野市立多西小学校と神奈川県川崎市立菅小学校の二校で訪問授業を実施しました。小学校向けの訪問授業は、林ゼミにとつて初めての挑戦でした。

あきる野市立多西小学校では、六年生の三つのクラスを対象にして、前年に実施したフィリピン現地調査の経験を用いながら、「ゴミ問題」、そして生活に対してもっとも身近である「水」をテーマにした授業を行いました。各クラスで六グループに分かれてもらい、地図帳を用いたワークや多くのクイズを実施しまし

た。

授業の中の写真にも登場した、上水道の整備されていない国・地域で水を運ぶのに使われる水がめの実物を持ち上げてもらって体験してもらいました。水がめには水を入れていたので、なかなか持ち上げることでできない児童もいました。授業後のアンケートには「日本での生活が当たり前ではないことを知ることができた」、「節水を心がけたい」、「ゴミの分別をきちんとしたい」、「世界のことに興味を持つことができた」等の感想がありました。

川崎市立菅小学校では、五年生を対象にして四クラス合同の授業を行い、フィリピンでの「ゴミ問題」、そしてその解決策である「コンポスト」をテーマに授業を実施しました。合同授業の後、各クラスに戻り、振り返りの時間をとりました。そこでは、児童たちが多くの質問をし、学生たちが合同授業では説明しきれなかった内容を伝えていました。



川崎市立菅小学校での授業風景

え、あの先生が シリーズ②⑧

経済学部 平繁 佳織



二〇一八年四月に経済学部の英語教員として着任いたしました、平繁佳織（ひらしげかおり）と申します。入試の採点を終え、ようやく年が廻ったことを実感しながら筆をとっております。担当科目は一・二年生の必修英語と無学年制の特設英語です。本学に着任する以前は、アイルランド国立大学ダブリン校の PhD プログラムに所属しつつ、同大学の非常勤講師・チューターをしておりました。専任教員としての職に就くのは、中央大学が初めてになります。

専門は英語圏文学、特に小説と演劇を中心とした二〇世紀前半のアイランド文学です。英文学というといギリス・アメリカ文学を思い浮かべる方が多いと思いますが、世界共通語として英語がそれぞれの地域で独自の進化を遂げているいま、英文学の定義も変わっています。中でも

大英帝国の旧植民地であるアイルランドの文学作品は、国家・個人としてのアイデンティティの問題を模索するものが多く、グローバルという言葉がもてはやされる時代に生きる我々にも通じるものがあるように思います。

アイデンティティとは、自分が誰であるかを自分で定義することです。授業の初回、私は教壇に立つと、まずは英語で一〇分ほど話し続けます。私の名前と外見を目にした学生は「日本人の先生のはずなのに」と、そこで一度当惑します。そして「いま言ったことの何パーセントくらい伝わりましたか」と日本語に切り替えた瞬間、学生は安堵感と、ある種の不信感とが入り混じった、実に居心地の悪そうな表情をします。私が授業を通して彼らに伝えたいことは二つ、「人を外見や肩書など、わかりやすい指標で判断しない」ということ。そして、「自分とは何者かを自分の言葉で説明できる表現力を養う」ということです。

大学で実際に何を学び、何を得たか、それ自体も大切ですが、最終的にはそれをどんな言葉でどのように語るかということが、その人となりを示す鏡となります。私が英語を話

すのは、幼稚園・小学生時代をアメリカで過ごした帰国子女であるからと言うことはひとつの説明にはなりますが、私はそれよりも、日本に帰国した時に日本語に苦労したこと、そのことで英語が嫌いになったこと、それでも『ハリー・ポッター』のおかげで英語を失わずに済んだことの方が、帰国子女という便利で曖昧な一語より、よほど自分という人間をよく表していると思います。学生たちには、自分をどう語るか、どう語れるようになりたいかをイメージしながら、有意義な大学生活を送ってほしいと願っています。

最後になりましたが、中央大学の恵まれた研究・教育環境に改めて感謝申し上げますと共に、大学発展の一助となるよう精進してまいります。今後ともどうぞよろしく願っています。



編集後記

今年も卒業の時期がやってまいりました。卒業生が、中央大学経済学部で学んだこと、物事を深く考え、つねに新たなことを学ぼうという態度を忘れず、社会で大いに活躍されることを期待しています。

さて、本会の総会についてですが、今年は六月八日（土）を予定しています。詳細は次号でお知らせいたしますが、多くの会員のご参加を期待しております。

（幹事長 濱岡 剛）



2019 年 3 月 30 日 第 72 号
発行 白門経友会常任幹事会
編集 白門経友会編集委員会
〒192-0393
東京都八王子市東中野 742-1
中央大学経済学部に
URL : www.wg-keiyukai.com
Fax : 042-673-3425